

— 資 料 —

被服製作実習における基礎縫い練習の効果

古 田 貴美子

The Effects of Basic Sewing Training in Clothes Making Practice

Kimiko FURUTA

要 旨

大学生の被服製作の技術を向上させるため、2016年から実習の時間内に基礎縫いの練習を取り入れた。取り入れる以前の2013年～2015年と2016年～2017年の5年間に被服製作実習を受講した182名の課題作品の評価を年度別に、前半のスカート、後半のブラウスの技術点で比較し、基礎縫いを練習したことによる効果が見られるかを検証した。その結果、基礎縫いの練習を取り入れた2016年～2017年では、スカート評価点、ブラウス評価点の平均値が上がり、低い点を取る学生が減少した。また製作の感想・反省を記述した実習記録からは、技術が上達したとの達成感を感じた学生が約9割に至り、基礎縫いの練習が製作技術の習得に効果のあることがわかった。

キーワード：被服製作実習、基礎縫い、実習記録、評価、指導法

1. はじめに

筆者は短期大学や大学で被服製作実習を担当している。家庭科の教員免許状を取得したい学生にとって製作実習は必須科目であり、被服を専門的に学ぶ場合は、被服構成に関する基本的な知識と技術を習得することが重要である。大学で授業を始める以前に経験した被服実習を問うと、課題は小物のことが多く、被服製作の経験がある学生は少ない。また、すでにするしがついている布を使用することが増えているため、布地の扱いや道具の使用などを学ぶ機会はほとんどないと思われる。しかし、大学の授業では、教員や専門家として最低限必要な技術と知識を身に付けなければならない、ブラウス製作は必須の課題とされていることが多い。なぜなら、ブラウスは立体的な衣服の構成を学ぶことができ、様々な縫製の技術を学ぶために適した衣服だからである。一般的に、大学1年次の授業でブラウスが製作課題となる。

実習指導にあたっては、大学入学以前の家庭科において、手縫いの基本的な技術を習得済みであることを前提に授業を行ってきたが、間違った縫い方をする人や完成までに大変時間を要することが多くなってきた。2014年頃から、予想外の行動を見かけることが多くなったので、学生が実際にしていた縫い方と道具の使い方を書き留めるようにした。そこには、しつけをするとき、右手で針を持ち、左から右へ縫い進む、下から上に向かって縫い進む、1針ずつ

針を出す（表でも裏でも必ず針を抜く）、5～6 cm の針目で縫うなどが記録されている。また、スカートやブラウスを作るときに、しるしを見ないでまち針を打ったり、しるしから0.5 cm ほど離れたところをミシン縫いしたりする様子を見て、しるし通りに縫わないのはなぜなのか疑問に思いながら指導したことがある。その後も、なみ縫いができない学生が非常に多くなったので、手先の不器用さだけでなく、縫い方を知らないのではないかと初めて疑うに至った。

そこで、2016年からは指導方法を変え、なみ縫いやまつり縫いなど基本に立ち返って一斉に練習する時間を設けた。その後、間違った縫い方が少なくなり、完成までに要する時間が減少したこともあって、縫い方を理解し、技術が身に付いたと指導する立場では感じる。本稿では、指導方法を変えたことにより効果があったのかどうか、実習評価点と製作品の技術点や実習記録から検証を行った。

2. 研究方法

短期大学1年次生に対して前期に開講している「被服構成基礎実習」において、指導方法の改善を目指している。15回の授業（1回は90分×2コマ）で製作課題は2作品である。前半は、基本的な縫い方と道具の使用方を身に付けることを目標に、スカートを製作する。後半は、被服構成の基本の技術を身に付けるために、ブラウスを製作する。これらの課題は、図1のようなデザインである。被服製作に必要な技術が習得できたかは、筆者の作品評価から判断し、2013年から2017年までの最近5年間について分析した。作品と同時に提出する実習記録より、学生自身の実習行動と成果を読み取った。実習記録の例を図2に示す。

全15回の授業予定は、表1の通りである。2016年、2017年は、基礎縫いの時間を授業の内容に応じて計3回、各回30分～40分程度設けている。2015年以前は、縫い方の間違いに気がついたとき個別に指導を行った。

授業の成績評価方法を表2に示す。評価する対象は、課題作品の他に実習記録、筆記テスト、提出状況である。課題作品の評価は、表3に示す基準により、誤りがあれば減点する方法で行った。スカートの技術点は、5項目各5点で25点満点、ブラウスの技術点は、9項目各5点、45点満点とした。

2013年から2017年までの受講者数すなわち被服実習を行った学生は、合計182名である。2013年から順に、44名、42名、38名、31名、27名と徐々に減少しているが、毎年、学年在籍者のおよそ3割が受講する。2年生の受講者も少数名含んでいるが、以前に被服実習の経験がないこと、技術に差がないことから、特に学年による区別はしなかった。

3. 結果および考察

(1) ブラウス、スカートの技術点の推移

各年度の実習成績を表4に示し、表5に各年度のブラウス、スカート技術点の平均、標準偏差、最高点と最低点を示した。実習成績については、2015年以降、平均点が上がり、標準偏差が小さくなっている。表5の最高点を見ると、どの年度もほとんど同じである。スカート点は25点満点で最高点23～24点、ブラウス点の最高点は45点満点で42～43点となっている。

表1 授業内容 (2017年)

回	課題1	課題2	内容	準備
1	8枚はぎのスカート	基礎縫い①	採寸, 縮尺1/4製図, 型紙作成	裁縫道具 布地・糸
2	上半身原型		採寸, 原型製図, なみ縫いの練習	
3	8枚はぎのスカート		地直し, 裁断, しるしつけ	
4	〃		ミシンの使用法, 布端の始末	
5	〃	基礎縫い②	縫い合わせ (しつけ縫い・ミシン縫い)	作品提出 布地・糸 接着芯
6	〃		すそ縫い, ベルト付け	
7	〃	ブラウス	ベルト付け, ゴム通し, 型紙作成 (身頃)	
8	ブラウス		型紙作成 (衿・袖)	
9	〃	裁断, しるしつけ		
10	〃	ダーツ縫い, 縫いしろの始末		
11	〃	肩縫い, 衿作り, 見返し始末		
12	〃	基礎縫い③	まつり縫い, 衿付け, わき縫い	
13	〃		すそ縫い, 袖作り, 袖下縫い	
14	〃	袖付け		
15	〃	筆記テスト	ボタンホール, ボタン付け	ボタン 作品提出

表2 評価方法

評価項目	内容
スカート	(1)作品 (2)実習記録
ブラウス	(1)作品 (2)実習記録
筆記テスト	道具の名称, 使用方法, 製作順序, 製作技法などの知識を問う
提出日	締切日前に提出→加点、締切日に遅れて提出→減点



図1 課題作品 (スカート・ブラウス)
製作者の承諾を得て掲載

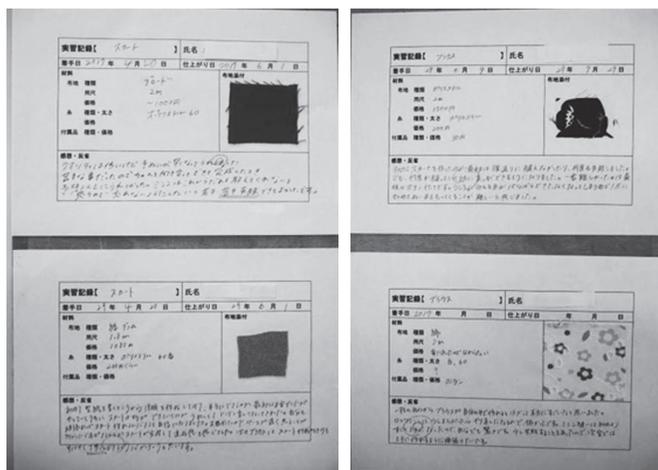


図2 実習記録 (スカート・ブラウス)

表3 製作課題の評価基準

課題	項目	目標
スカート (25点) 各項目 【5点】	①わき縫い ②すそ縫い ③ベルト付け ④ロックミシン ⑤糸始末	縫い合わせ ・しるしが合っている ・まっすぐ縫える 三つ折り縫い ・折り幅がそろっている ・端縫いができている 布端の始末 ・ロックミシンが美しい ・縫いしろ幅がそろっている アイロン ・正しい縫いしろの割り方ができる ・しわがなく美しい 糸の始末 ・返し縫いをしている ・糸切りができている ・しつけが残っていない
ブラウス (45点) 各項目 【5点】	①ダーツ縫い ②衿の形 ③衿付け ④肩縫い・わき縫い ⑤すそ縫い・前端 ⑥袖の形・袖付け ⑦ロックミシン ⑧アイロンがけ ⑨糸始末・ボタン ホール・付け	・製作の方法が正しい ・各部位の形や左右の長さが整っていて美しい ・縫製が美しい ・縫いしろの始末ができている ・糸始末ができている ・アイロンを適切に使えている など

表4 年度別の実習成績

年度	受講者数 (人)	評価点 (100点満点)			
		平均	標準偏差	最高点	最低点
2013年	44	78.46	10.13	95	60
2014年	42	75.33	10.01	93	60
2015年	38	80.53	7.95	96	60
2016年	31	81.45	7.46	97	70
2017年	27	80.48	7.42	96	68

表5 年度別の技術点

年度	受講者数 (人)	スカート点 (25点満点)				ブラウス点 (45点満点)			
		平均	標準偏差	最高点	最低点	平均	標準偏差	最高点	最低点
2013年	44	19.36	2.87	24	12	32.71	5.46	42	21
2014年	42	17.79	3.42	24	11	30.71	5.81	42	19
2015年	38	18.05	3.07	24	11	33.76	4.27	42	23
2016年	31	19.45	2.22	24	16	35.94	3.51	43	29
2017年	27	19.19	3.68	23	16	35.37	2.34	42	29

スカートの平均点は17.79点から19.45点と2点以内であり、差は小さいと思われるが、2016年の平均点が高く、標準偏差が小さいことがわかる。

ブラウスは、2013年～2015年より2016年・2017年の方が、平均点が高くなり、標準偏差が小さくなっている。最低点を比較すると、2016年・2017年がスカート点16点、ブラウス点29点と両方ともに2015年以前より高くなっている。各項目の点数に換算すると、5点満点中およそ3.2点で、項目ごとの減点は1～2箇所、誤りが少なくなっている。縫い方を指導することによって、技術が向上したと考えられる。

スカートは、手縫い（しつけ）とミシン縫いをたくさん練習するための課題であり、しるしとしるしを合わせて、しるし通りに縫うこと、また縫いしろの幅をそろえること、アイロンやロックミシンを適切に使用することなどが達成できれば、高得点が得られる。また、ミシン縫いをするとき、縫い始めと縫い終わりの返し縫いをする、糸切りをすることも忘れがちなので、特に注意し、評価するポイントであることを伝えている。

ブラウスは被服構成を学ぶ目的があり、立体的な被服を構成するにはどんなパーツをどのように縫うのか、どんな技法が使われるのかを実習を通して学んでいく。ダーツのように布をつまんで縫う方法や衿付け、袖付けのように形の異なる曲線と曲線の縫い合わせがあり、技術的に難しい部位もある。左右の長さを同一にしなければならない部位は、しるし通りに縫い合わせができないと減点である。

次に、学生個々の技術が変化したのか確かめるために、スカート技術点とブラウス技術点の関係を図3に表した。分布図を比較すると、スカート点、ブラウス点共に高い学生は少ないけれども、毎年ほぼ同じ点数を得ていることがわかる。手先の器用さと取り組む姿勢とが相まって、技術が高まると考えられる。

2013年から2015年までは、スカートの評価が11点でブラウスの評価が20点前後と両方の課題の点数が低い学生がいる。どちらの課題においても技術が低い学生である。手縫い、ミシン縫いの技術を身に付けられなかったのも、さらに技術が難しいブラウスは評価が低い結果となった。2016年と2017年は最低点が高くなっているが、その中でスカート点が低くてもブラウス点で評価が高くなる学生が多い。後半になるほどミシンの扱いに慣れ、正確に縫えるようになったことと、曲線の縫い合わせなど難しい部位を上手に縫うことができるようになったことがその理由である。正しい針の持ち方や縫い方など基本の技術を習得した成果とも言える。

それとは逆に、2017年には、スカート点は高いがブラウス点は低い学生がいる。ミシン縫いは上手であるが、曲線やわになっている部分を合わせて縫うのが苦手と見ている。2016年・2017年の最低点は、2014年の平均点とほぼ同じである。全体的に技術が向上しているのは明らかである。〔注〕わ…丸くつながっている状態。ミシン縫いは、1周して同じところに戻る。

表6は、ブラウス評価点を5点ごとに区分し人数を示したものである。年度の比較をするため、図4に各区分の割合を表した。ブラウス点36点は、9項目の平均が5点満点中4点、減点が1箇所以内で、ほぼ良い出来という評価である。2016年は受講者の約60%が平均4点以上を得ている。2017年は、平均4点以上が45%程度であるが、そのうち評価点41点から45点（満点）を得たものは約10%いる。また、2016年、2017年はそれ以前より、低い評価点が少ない。

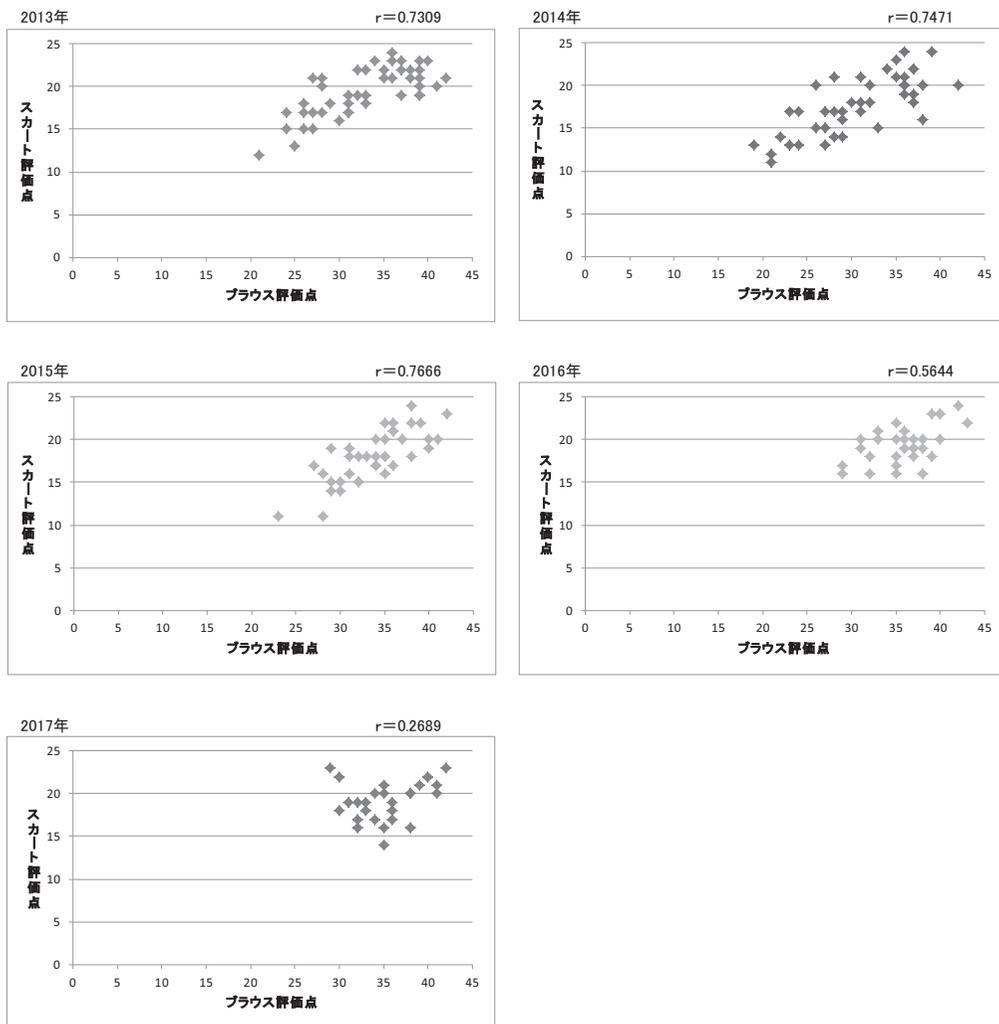


図3 年度別 スカート評価点とブラウス評価点の関係 (r: 相関係数)

表6 ブラウス点の分布人数 ()内は割合を示す

		年度					人 (%)
		2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	
年度 (点) 受講者数		44人	42人	38人	31人	27人	
ブラウス点	41~45	2(4.5)	1(2.4)	2(5.3)	2(6.5)	3(11.1)	
	36~40	15(34.1)	12(28.6)	11(28.9)	16(51.6)	9(33.3)	
	31~35	12(27.3)	9(21.4)	16(42.1)	11(35.5)	12(44.4)	
	26~30	11(25.0)	12(28.6)	8(21.1)	2(6.5)	3(11.1)	
	21~25	4(9.1)	7(16.7)	1(2.6)	0	0	
	16~20	0	1(2.4)	0	0	0	

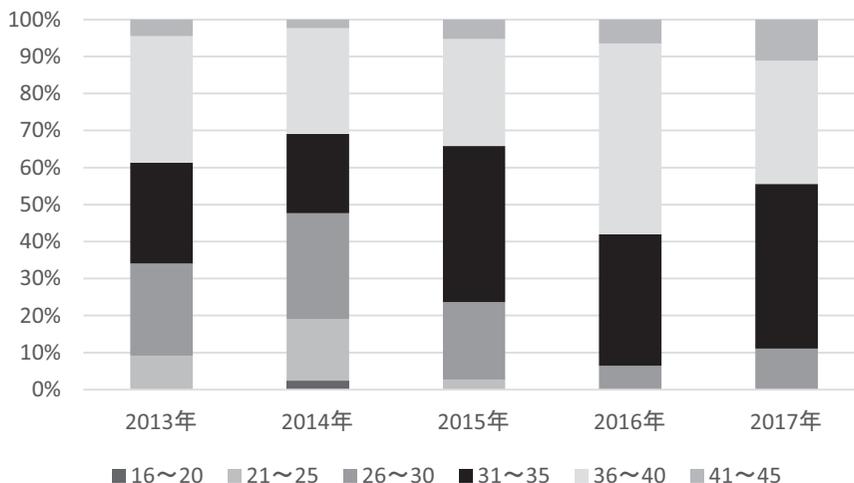


図4 ブラウス評価点の年度による比較

縫製の面で減点はあっても、間違った縫い方はほとんど見られなくなった。

(2) 実習記録の記述内容

作品提出と同時に、材料と感想・反省を書いたものを、実習記録として提出させている。全員デザインが同じである場合は、用紙は簡単なもので、感想・反省の記述欄は4～5行程度の大きさである。実習の振り返り、自己評価として、成績を付ける際の評価項目としている。

ブラウス製作について、記述を全て読み取り、内容を「難しかった」「うれしかった、よかった」「楽しかった」「達成した（できた）、気づいた」「反省点、今後に向けた意気込み」に分けて、それぞれの人数を記したものが表7である。「難しかった」と真っ先に記述したものは多く、また人数もかなり多い。15回の授業回で課題を完成させるのは困難としか思えない状況もあったであろう。「ブラウスはスカートより難しかった」や「袖付け、衿付けが難しかった」など多数が書いているが、実際に作ってみなければわからないことである。一方、完成したときの達成感が大きく、「上手にできた」「ミシンが上手く使えるようになった」なども多く書かれている。その他には、「自分でも作りたい」「早く着たい」「次はもっと丁寧にするように心がけたい」など意欲的な記述もあった。ほとんどが複数の感想や反省を記しており、今後どうしたいのかも記述している。これまでに被服製作の機会がなく、基本的な技術の差や手先の器用さの違いから、難しさや出来上がりの差が生じたとしても、実習を経験することの意味は大きいと思われる。

年度によって記述内容に違いがあるのか確かめるために、受講者数に対する割合を年度ごとに表したのが図5である。2017年は「難しかった」との記述が前年までより減り、「達成した・気づいた」記述が最も多い。2013年、2014年は「難しかった」が約8割で、「達成した、気づいた」が約5割である。2017年は逆転した結果である。「うれしい・よかった」「楽しかった」は、年度が違ってほぼ同じ割合で見られた。

表7 実習記録の内容

記録内容	年度 受講者数	記述人数：人（％）				
		2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
		44人	42人	38人	31人	27人
難しかった		37(84.1)	33(78.6)	35(92.1)	24(77.4)	14(51.9)
うれしい、よかった		29(65.9)	26(61.9)	6(15.8)	19(61.3)	15(55.6)
楽しかった		6(13.6)	11(26.2)	5(13.2)	3(9.7)	3(11.1)
達成した、気づいた		22(50.0)	18(42.9)	32(84.2)	27(87.1)	25(92.6)
反省、今後に向けて		21(47.7)	21(50.0)	22(57.9)	14(45.2)	17(63.0)

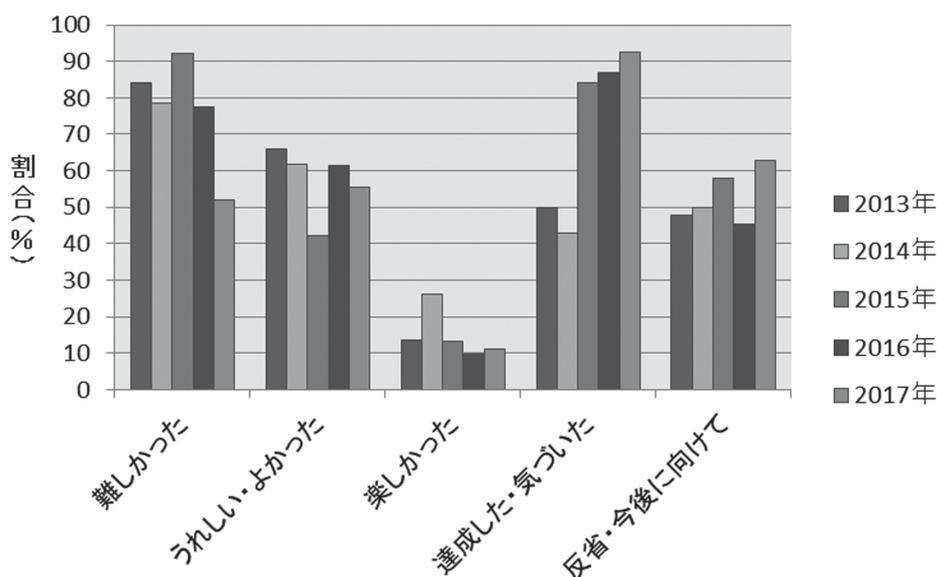


図5 実習記録の内容 年度の比較

次に、実際にブラウス製作のどの部分が難しいと感じたのかを記述より分析した。表8に、難しかったところと記入した人数を示した。2014年から2016年まで、受講者の3分の1は、ブラウス製作が難しいと記述した。中でも袖付け、衿付けが難しい部位である。筆者も指導するときに、「難しいけれど、上手にできれば全体の出来映えが良く見える」と説明している。

技術では、ミシン縫い、ロックミシン縫いについて、2013年から2015年までは、実習後半になっても難しく思っている学生がいるのに対し、2017年にはいなかった。「ミシン縫いが曲がった」「しるし通りに縫えなかった」などの理由は、まち針の打ち方やしつけ縫いができていないことによる。準備が整っていなかったら上手く縫えないので、ミシンの扱いが下手というより、縫い方の基本が身に付いていなかったためだと思われる。

表8 実習記録より「難しかった」と記述された作り方と技術

難しかったところ		年度 受講者数	記述人数：人（％）				
		2013年 44人	2014年 42人	2015年 38人	2016年 31人	2017年 27人	
ブラウス 作り方	製図	1(2.3)	3(7.1)	6(15.8)	0	1(3.7)	
	ダーツ	1(2.3)	3(7.1)	6(15.8)	1(3.2)	0	
	衿・衿付け	10(22.7)	4(9.5)	6(15.8)	7(22.6)	2(7.4)	
	袖・袖付け	11(25.0)	9(21.4)	9(23.7)	7(22.6)	4(14.8)	
	ギャザーよせ	5(11.4)	4(9.5)	3(7.9)	4(12.9)	1(3.7)	
	ボタンホール・付け	2(4.5)	0	2(5.3)	0	1(3.7)	
	カーブ、わの部分	0	0	1(2.6)	1(3.2)	1(3.7)	
	ブラウス全体	10(22.7)	15(35.7)	13(34.2)	11(35.5)	5(18.5)	
技術	ミシン縫い	4(9.1)	4(9.5)	4(10.5)	0	0	
	ロックミシン縫い	5(11.4)	2(4.8)	3(7.9)	4(12.9)	0	
	アイロン	0	0	0	2(6.5)	1(3.7)	
	布地の柄合わせ等	0	2(4.8)	1(2.6)	0	1(3.7)	
	出来映え	6(13.6)	0	2(5.3)	0	0	

4. おわりに

筆者が昨年行った、手縫いとミシン縫いに関する研究では、ミシン縫いの技術の上達は手縫いの上達よりも容易であった¹⁾。被服構成の専門的な知識と技術を習得するために行われる、大学の被服製作実習ではミシンを使用するのはもちろんであるが、ミシン縫いに取り掛かる前の準備は大変重要な部分を占める。本研究では、それらを確認する基礎縫いの練習が実習の評価点を向上させ、とりわけ後半になるほど高い効果をもたらすことが示唆された。

毎年、製作実習の指導方法を改良しようと試みているが、実習中の学生の観察や記録などから筆者自身が改めて気づかされることもある。大学生なら基礎縫いを身に付けているはずという先入観にとらわれず、基礎縫いの練習を取り入れたことで、作品の出来映えが良くなり、作業時間の短縮にもつながった。作品が出来たときの達成感の大きさが苦手意識を上回った結果から、意欲が高まり、習得した技術が今後も生かされると期待している。

引用文献

- 1) 古田貴美子：女子大生の被服実習に対する意識と基本縫いの技術に関する考察，神戸女子短期大学論叢，第62巻，15～25（2017）

参考文献

- 2) 文部科学省：学習指導要領，中学校学習指導要領，第2章 各教科 第8節 技術・家庭，
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gika.htm#ka
- 3) 多田俊文編：教職課程講座5 教育の方法と技術 四訂版，学芸図書株式会社（2015）